

【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅（住宅型ホテル） 都市〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人〔建物形式〕 1 棟単体型 複数棟集合型 団地型 集落（都市全体に分散）〔建物状況〕 新築 増築 改修 一部改修 既存〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代

写真1 街路が連なる古い街並み

レッジョ・エミリアには、「世界で最も革新的な学校」と称された幼児学校がある。この教育が創出された背景には、イタリアにおける戦争／政治の歴史、優れた芸術性をもつデザイン之力、そして広場で練り広げられる多様な人々の社会的営みとレッジョ・アプローチとの繋がりがあ。これは、子育てや教育が起点となる「コミュニティ・ハブ」の一つの事例でもある。

視察日 2019年11月3日

記録担当者 浜崎裕子, 古賀政好

1. レッジョ・エミリアの特性と歴史

1) レッジョ・エミリアの地理的特性と街の歴史

レッジョ・エミリアは、古代ローマ時代の街道であるエミリア街道沿いに発展した都市の一つであり、レギウム・レピディ Regium Lepidi という名で183年に建設が始まった、古い都市である。地理的特性として、自治都市としての長い歴史を持つ都市と街道沿いに連続していることが挙げられる。パルマとモデナに挟まれ、またエミリア＝ローマニア州の州都ボローニャから西北西へ61kmに位置する。旧市街は、12世紀頃に建設された六角形の城壁に囲まれており、城壁の内側ではしばし安定的な発展がもたらされた。その後も支配者が次々と変わるなどの混乱も続き、16世紀後半には都市防備のために城壁の外側600mまでは平坦に取り壊されたため、都市の規模的拡大や発展は妨げられた。旧市街に建つ建物の多くは16,17世紀に建てられたものである。

19世紀後半から経済成長と人口増加が進み、古い城壁を壊して市域を広げ、街の縁辺部に工場地帯が拡大し、

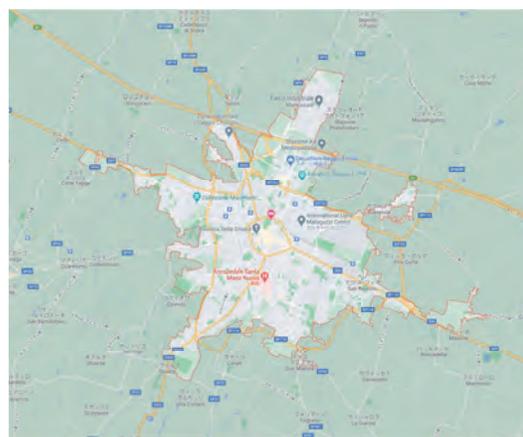


図1 レッジョ・エミリア (Googlemapより)

工場労働者が起業したアルチザン（職人）企業を中心に強力な社会主義が育った。移民の街としての歴史を持ち、**現在では100以上の人種の人々が暮らしている。またレッジョ・エミリアは、イタリア社会を特徴付ける社会的協同組合が誕生した地としても知られており、様々な公共サービスや、社会的弱者への社会サービスが展開されていった。世界大戦で敗戦国となったイタリアのなかで、パルチザン運動が盛んであったことから特に激しい戦禍に遭い、街の建物も大きな被害を受けた。この街をどのように再生させるかという時に母親たちがレンガを積んで共同保育所を作ったという歴史があり¹⁾、日々の保育・幼児教育を通じた社会変革がコミュニティの発展と文化刷新につながるという思想が現在も生きている。**

2) レッジョ・エミリアの特性と報告の視座

レッジョ・エミリアの保育・幼児教育の実践は1990年代に国際的にも紹介され、世界中の保育関係者に注目されているが、今回の訪問は日曜日で保育所や関連施設は全て休館のため視察はできなかった。しかし、広場や

1) 秋田喜代美「レッジョ・エミリアに学ぶ保育の本質」『子ども学』Vol.1, 2013



図2 視察マップ (Google マップを基に作成 (山田))

保育所（外観）など「レッジョ・アプローチ」の参考文献に挙げられている場所を街歩きしながら訪ねた。したがって幼児教育を担うペタゴジスタやアトリエスタによる教育内容等に関して本報告では言及しない。

レッジョ・エミリアに関する事前の情報収集により得たイタリアの社会・文化の歴史や思想は、その後の調査対象地での知見に繋がるものもあり、「コミュニティ・ハブ」というキーワードや「地区の家」の活動と関連付けて考察すると以下の3つの事項を提示できる。

- 1) レッジョ・エミリアの乳児保育所・幼児学校は、コミュニティ・ハブとして位置付けられている。
- 2) 社会的協同組合は、イタリアで最初にレッジョ・エミリアで結成され、アソシエーションとともに地区の家を設立・運営する主体となっている。
- 3) レッジョ・エミリアは移民の街として発展してきた歴史があり、それは今日の共生社会を築くに当たって、福祉起点型共生コミュニティの形成に多くの示唆を与える。

2. 乳児保育所・幼児学校

イタリアでは、保育・幼児教育はローマカソリック教会の支配下にあったが、1963年にレッジョ・エミリアで初めて公立保育所が創設された。そして教育の公共圏を保育・幼児教育の領域に構築するレッジョ・エミリアの教育を創出した。自治体の乳幼児保育所と幼児学校が子どもの権利を保障し、子どもは一人の市民であり、子ども、保育者・教師、家族、地域全体で「共同体」をつくり、皆が互恵的に学びあい支えあいながら子どもを育てていく。その意味では、乳幼児保育所や幼児学校がコミュニティ・ハブとなる。

旧市街北端に位置し、城壁内で最も大きい公園、ポロ公園 Porco del Popolo の一角にあるダイアナ公立保育所 Scuola dell'infanzia Diana / Diana municipal Preschool は、レッジョ・エミリア教育のモデル校である。公園内の遊具も園庭の延長上にあり、市民に開かれた場で幼児教育が行われ、コミュニティで子どもを育てている姿と捉えることができる。

また、ボローニャの中央駅近くのモンタニョーラ



写真2 Diana municipal Preschool

緑豊かな公園にあるレッジョ・エミリア教育のモデル校となった幼児学校で、その内部の空間構成の特徴は、玄関ホールを入るとピアッツアと呼ばれるスペースがあり、このピアッツアの周りにアトリエや各クラスの部屋が配置されている。



写真3 ボローニャの Montagnola 公園

バスターミナルに隣接し、駅からダウンタウンに向かうところに位置する公園で、その一角にある保育所に向かう親子の朝の風景。

- 2) 佐藤学「ローリス・マラグッツィの思想の歴史の意味」『発達』Vol.156, 2018
- 3) 醍醐孝典「“世界で最も先進的な”初等教育レッジョ・エミリアの《レッジョ・アプローチ》」『BIOCITY』Vol.77, 2019
- 4) 猶原和子：大人も子どもも市民として育つ環境をつくる-レッジョ・エミリア市の実践からの示唆，江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要，Vol.1, 2018



写真4 ライオンの像

子どもたちはライオンの足を粘土で形どったり写真やスケッチに記録して帰る。それに続く園内活動で現場のスライド映像を見たり，ライオンにまつわる絵本を読んだりしたあと創作活動に入る。時間をかけてプロジェクトを進めていく。



写真5 広場 Piazza Camillo Prampolini

街中には多くの教会や広場がある。街の中心の広場にはレジスタンス運動の記念像が建てられている⁴⁾。マーケットも立ち，人々が出会い，おしゃべりし，政治について語ったり，路上芝居も行う。市民生活における共生の場であり，民主的世論が形成される場である。

Montagnola 公園の一角にも乳幼児保育所があり，出勤前の親がゆったりと子どもと手をつないだり，乳母車を押しながら公園を通り抜けて保育所に向かっており，ゆとりをもって子育てをしている様相が見受けられた。

3. レッジョ・アプローチ

レッジョ・アプローチの基礎を築いたのは，教育者ローリス・マラグッツィ (1920～94) で，この教育法の特徴を示すものは，「プロジェクトツィオーネ；一定期間に行なわれる子どもたちの活動プロジェクトの単位」と「ドキュメンテーション」である。

映像ドキュメント「ライオンの肖像」²⁾ は，教会入り口の両脇に置かれた石造のライオンと子ども達が戯れているところから始まるプロジェクトツィオーネの実践記録で，レッジョ・エミリア教育を紹介する教材として広く知られているが，写真4がそのライオンの石像である。ドキュメントのなかで子どもたちは，このライオンの像を触ったりスケッチをする。そうして得た驚き・発見・興味をきっかけに子ども同士・教師・保護者・地域の人の対話が繰り広げられていく。この事例は，子どもたちが「まち」をテーマにした取組みであり，レッジョ・エミリアのまちづくりが教育と一体のものとして成り立っていて，先ずは子どもたちが「まち」をどう見ているか「聴く」ことから始まることを示している。このようにレッジョ・アプローチは幼児教育の分野にとどまらず，人づくりやまちづくりにも大きく関与しており，幼児学校という場を通じて「参加型まちづくり」として展開していると言える。

参加型まちづくりプロセスの要となる人々の「対話」の場は「広場」である。広場は，イタリアをはじめヨーロッパの街で市民生活に欠かせない屋外空間であるが，レッジョ・エミリアのような移民の街では特に広場は多様な人種の人々の出会いと交流の場としてコミュニティ形成の重要な役割を担っている。レッジョ・エミリアで毎年5月に開催される「レッジョ・ナラ」は広場を中心に街を舞台としたフェスティバル³⁾である。このお祭りでは，子どもや幅広い世代の人々の多彩なイベントが催され，聴衆たちも互いに触発し合い，混沌とした新しい文化が

生まれている。

こうした、子どもの教育に関わる多様な人をつなぐ資料となるものの一つが「ドキュメンテーション」である。これは、子どもや教師の活動の様子をメモ、写真、動画などで記録し、後で教職員が整理して冊子やパネルにまとめていく活動である。成果報告ではなく、探究活動の経過を記録し、子どもの思考の視覚化や文字化を通して、客観的にそれらを説明する。つくられたドキュメンテーションは子どもが自分たちの次の学びや活動に生かしたり、保育者の指導の参考資料とすることもできると共に、その記録を保護者や住民など地域の誰もが目にする事ができて、より広いコミュニケーションを生む契機ともなる。子どもの有能さを捉えて価値を与えるドキュメンテーションは、子どもの生活、遊び、学びという文化生活を様々な表現で可視化することを乳幼児教育施設内での展開で終えることなく、街、イタリア国内外の教育関係者や市民との交流に用いられてきた。

レッジョ・エミリアの街にあるドキュメンテーションとしては、駅に続く地下道の壁に「こんな自転車があったら」を主題とした、幼児から中学生までのマーカー等の画材による描画、石や金属の素材による自転車のパネルが並んでいる。パネルの横にはイタリア語のみならず英語、中国語、アラビア語などで、子どもの思いや願いが書かれ、移民の街の特性が表現されている。

4. 「地区の家」への影響 ～ジェノバの地区の家

レッジョ・エミリア教育の活動や思想は、イタリア国内のみならず、世界各地の幼児教育や保育に影響を及ぼしている。各地で視察した地区の家では、子どもの図書コーナーがあり、子ども向けプログラムが組み込まれていた。このうち、レッジョ・エミリアの「子どものことを第一に考える」理念を持つプロジェクトは、ジェノバの旧軍用地にある地区の家でうかがうことができた。

この地域には低所得層のアパートが高密度に建ち並び、駐車場が整備されていない。このため、勤労者である大人にとっては生活利便性向上のために、広い空き地を公園



写真6 地下道の壁面にあるドキュメンテーション
「自転車」という題材に子どもたちは多様なイメージを膨らませて、個性のある表現で描写している。芸術活動に力を入れるレッジョ・エミリア教育の成果とも捉えられる。



写真7 多言語表示のドキュメンテーション
多くの人種が暮らす街で、幼児教育の現場における多文化共生を窺わせる表示である。

化するよりも駐車場が欲しいという要望があるが、周辺住民と子どものためのバリアフリーの公園を造るように市民運動を行い、計画が進行中である。現在は、地区の家の前の広場を子どもに開放し、放課後学習や本の読み聞かせを行なっているが、今後、母親の育児相談も行う予定など、地域の子どもの中心とした取組みが優先的に実践されている。

この地区の家が9つのアソシエーションの連携を基に設立・運営され、そのまちづくりコンセプトを柱に人々が協働して目的に向かって活動展開しているプロセスの基盤は、レッジョ・エミリアで始まった社会的協同組合にあると言えよう。イタリアの社会的協同組合は相互扶助の原則をより広く適用し、協同組合が付加する価値の受益者を組合員だけでなくコミュニティ全体に拡張し、社会的に不利な立場にある人々を包摂する。この考え方が法的に認知されたことで革新的な役割を果たしており、イタリア社会構築の重要な要素となっている。

以上のように、調査対象目的地の移動途中に立ち寄ったレッジョ・エミリアの街歩きは、本調査研究のイントロとして一定の教示を与えたと位置付けられる。

【キーワード】

〔施設種別〕高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅（住宅型ホテル） 図書館〔運営主体〕市区町村 法人 NPO 個人〔建物形式〕1棟単体型 複数棟集合型 団地型 集落〔建物状況〕新築 増築 改修 一部改修 既存〔対象者〕高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代

写真1 マッジョーレ広場側からのエントランス

1800年にいまの姿の原型ができた、古い証券取引場（Salaborsa）を改修して開設された市民のための図書館。多様な人々の居場所となるよう、空間づくりや運営に工夫や挑戦がなされている。市民にとって歴史的に政治や宗教を通じた集まりの場であり、市のシンボルでもあるマッジョーレ広場に面して立地し、知と文化による人々の活動の拠点となっている。

視察日 2019年11月4日

記録担当者 斎尾直子, 加藤悠介

1. ボローニャの概要

ボローニャ Bologna は、エミリア＝ロマーニャ州ボローニャ県の州都かつ県都である。西欧諸国で最古の大学とされるボローニャ大学（1088年創立）があることで著名な学園都市で、国際的な学会等も多数開催される。長い歴史を持つ都市であり、ローマ時代にはエミリア街道沿いの主要な都市として繁栄と衰退を繰り返した。19世紀初頭まで大規模な都市再開発が実施されなかったため、現在に中世の建築や町並みが残る。ボローニャ市は周辺集落を含めて人口約37万人（2018年）を擁し、年間観光客数300万人以上という一大観光都市でもある。

2. サラボルサ図書館の概要

1) サラボルサ図書館の立地



写真2 図書館周辺

表1 サラボルサ図書館の階構成（文献1）より、2014年時点）

2019.11においてもほぼ同様の用途である。

階	面積 (m2)	主な空間・機能
3階	1,189	Urban Center Bologna (都市計画・事業の展示空間、会議兼学習室)
2階	1,461	定期刊行物・雑誌の閲覧、学習スペース、 開架式書架・閲覧スペース、学習室
1階	4,000	受付カウンター、アトリウム、カフェ、 開架式書架・閲覧スペース、乳幼児・児童 向け図書スペース、PCスペース
地下1階	4,186	講堂、10代向け図書スペース、ローマ時代の 遺跡
地下2階	2,048	倉庫
計	12,884	



写真3 サラボルサ図書館の外の階段
エントランス前の階段にも人々が座ってくつろいでいる。

サラボルサ図書館は、ボローニャ市のなかで歴史的に政治と経済、文化、宗教の中心部であったマッジョーレ広場に面して立地している。また、図書館建物の南側には市庁舎として使われているアックルシオ宮殿が隣接している。ボローニャ市民にとって、この広場は市のシンボルであり、サラボルサ図書館の開館によって人々が文化的機能によって集うという学園都市ならではの拠点形成にも成功している。

2) 図書館の建物の特徴

<参考文献>

- 1) 小松尚, 小篠隆生: 公共空間としてのボローニャ市立「サラボルサ図書館」に関する考察; 日本建築学会計画系論文集 Vol.82, No.739, 2227-2237, 2017

図書館の建物は、1880年代におこなわれた増改築により現在の形になり、証券取引所、レストラン、銀行、

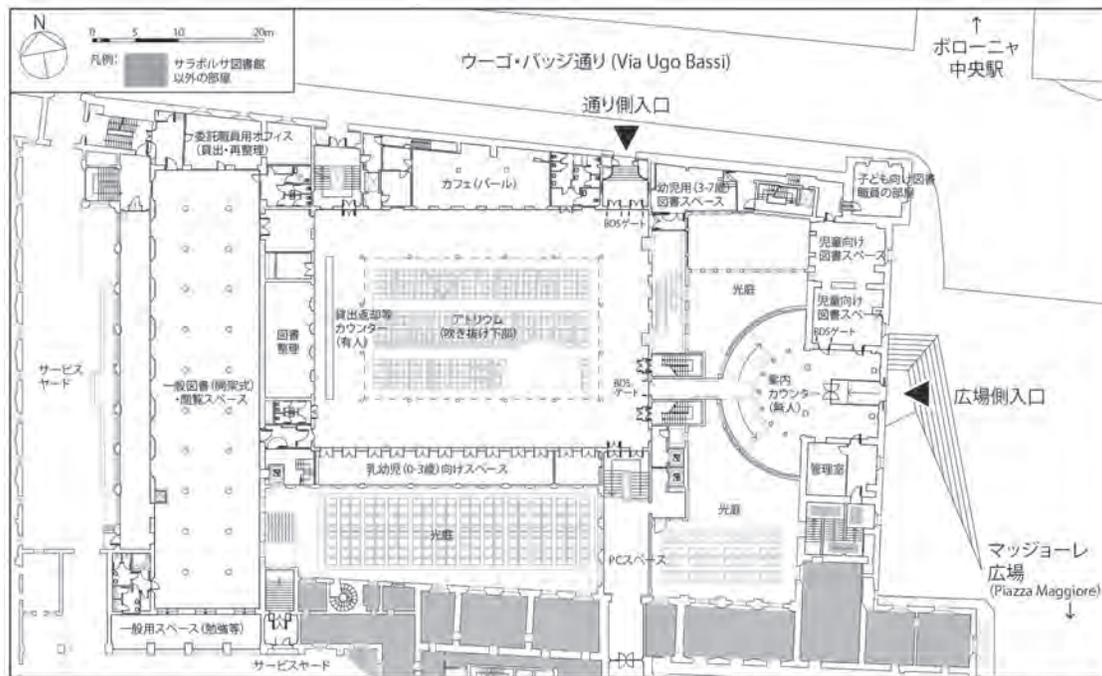


図2 サラボルサ図書館1階平面図

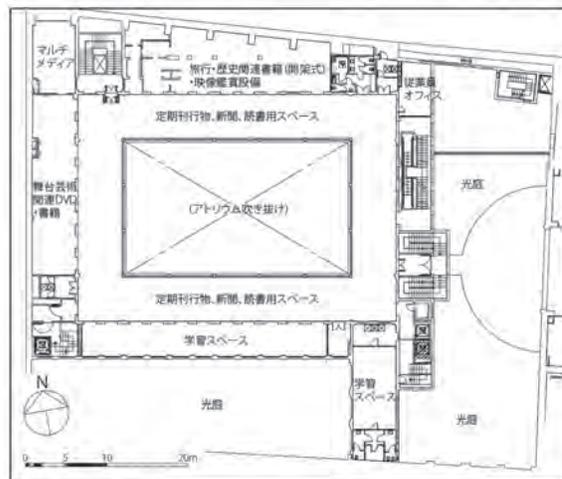


図3 サラボルサ図書館2階平面図

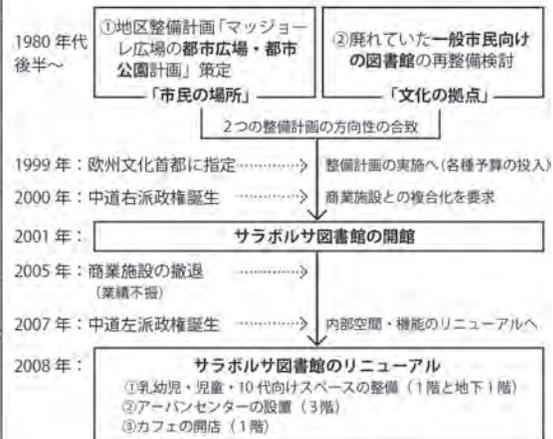


図4 サラボルサ図書館の整備経緯

図2～図4 サラボルサ図書館平面図(文献1)より

小劇場等に使用された。1980年代、図書館として「文化の拠点：廃れていた一般市民向けの図書館再整備検討」と「市民の場所：地区整備計画“マッジョーレ広場周辺都市公園整備”策定」、2つの整備計画の方向性が合致し、**屋根のない広場であるマッジョーレ広場に対して、屋根のある広場として**、2001年にマルチメディアや無料のインターネット端末を備えた図書館が**整備され**、開館した（表1、図2～4）。「サラボルサ Salaborsa」はイタリア語で証券取引所の**意味であり**、現図書館の愛称にもなっている。

図書館として建物を修理する際に、その地下に、ローマ時代の遺跡が発見された（写真7）。この遺跡は部分的に保存・修復されて見学ができるように見学路が整備され、発掘調査の資料が展示されている（写真8-10）。さらにそれが図書館からもが見えるように、エントランスホールを兼ねるアトリウムの床はガラス張りとなされ、足もとに都市の歴史を見ることができる。また、地下展示室へのアプローチ空間には、ローマ時代から現在にいたるまで、サラボルサ図書館のある地区や建物が都市の中でどのような機能を担ってきたのかを紹介したパネル展示がある。

マッジョーレ広場から、入り口カウンターを通り半階ほどゆるやかに下るスロープを抜けると3層吹抜けのアトリウムに出る（写真11, 12）。アトリウム中央からは、1～3層の様々なスペースを360度、見渡すことができる（写真13）。2～3階のテラス部分は、机や椅子、ソファ、PC、コピー機などが設えられたブラウジングコーナーとして使用されている（写真14～15）。アトリウムは、図書そのものではなく、人々が本を読んだり、勉強をしたりして過ごす様子が見える空間である。

1階アトリウム奥（東側）には貸出・返却等のカウンター（写真16）、一般閲覧室（写真17）、各種イベントが開かれる講堂（写真18）、こどもの本のゾーン（写真19-21）、乳幼児スペース、カフェ、と多様な場所がある。また、3階テラス部分にはボローニャ大学のスタジオなどがある（写真22）。以前はこのブース群の前の部屋に、アーバンデザインセンターが入っていたが、その役割が大きくなったために隣の建物に移転し、現在は空き室となっている。



写真7 地下のローマ時代の遺跡



写真8 サラボルサ図書館の建物の歴史展示

地下の遺跡に続く廊下では、サラボルサ図書館があった場所や建物の歴史が年代ごとに展示されている。



写真9 証券取引所時代の写真（階段踊り場の展示を撮影）

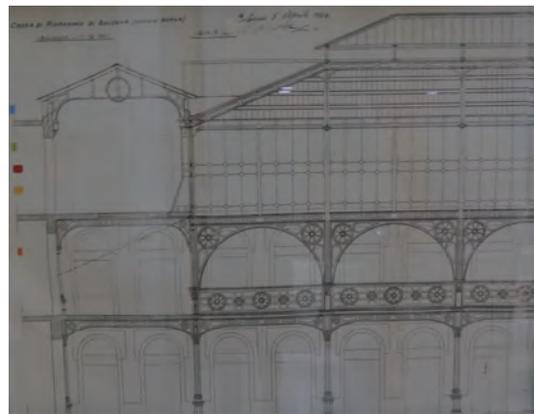


写真10 断面図（階段踊り場の展示を撮影）



写真 11 エントランスカウンター

左右のスロープをカウンター裏側に向かって下ると、アトリウムホールに出る



写真 12 アトリウムホールの展示と、ガラス張りの床

床の下にはローマ時代の遺跡がある。アトリウムホールには、テーマに沿って展示が行われている。

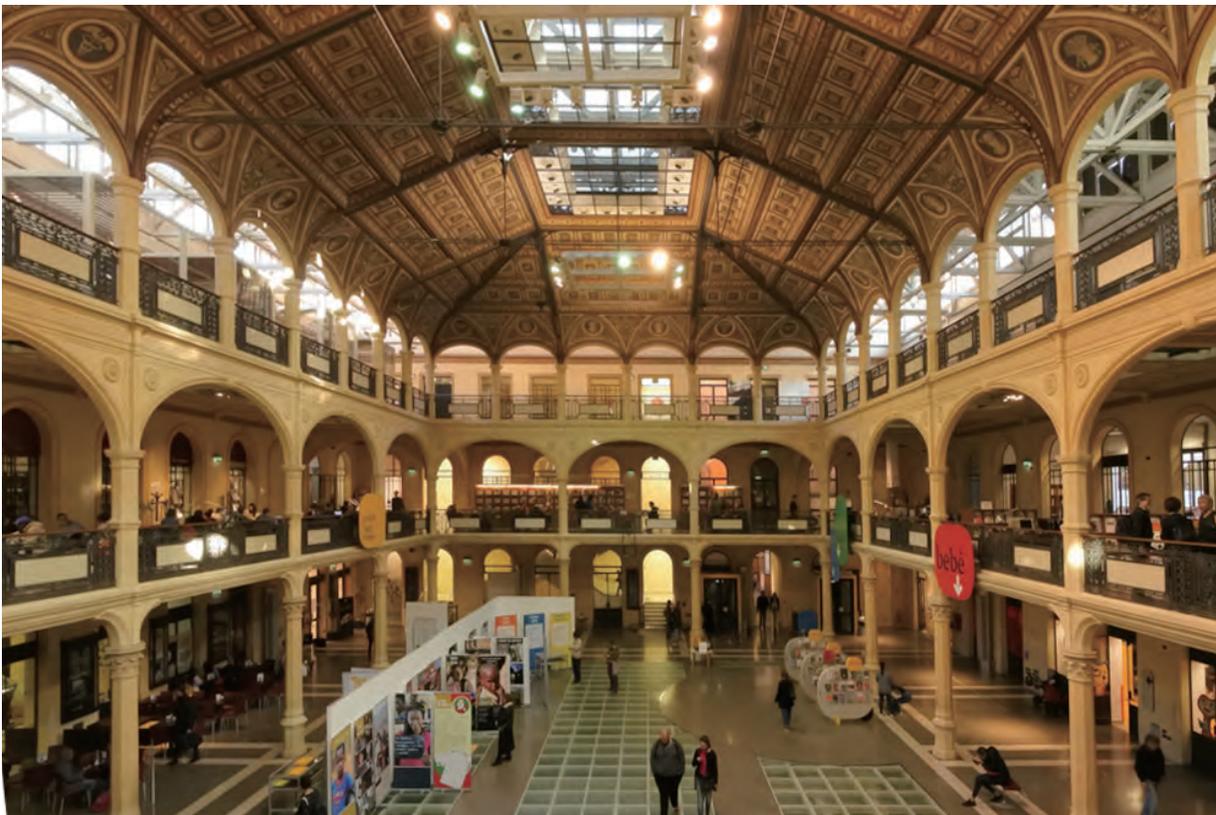


写真 13 3層吹き抜けのアトリウムホール

3層に重層したテラスでの人々の様々な振るまいを見渡すことができる。



写真 14 テラス部分のブラウジングコーナー



写真 15 テラス部分の、PCのある読書・学習スペース

3) 図書館の運営

開館から20年弱が過ぎ、いま図書館には1日約4,000人が訪れるという。また、図書館に関する全国規模の統計が存在しないイタリアにあって、サラボルサ図書館は目録や利用状況等の詳細な統計を取っている数少ない公共図書館である。

2008年のリニューアルでは、学術目的で利用する人だけではなく、一般人にも敷居が高くない、より魅力的な場所となることが目指された。このコンセプトの元、誰でも多様な層が無料でも過ごすことができるよう、従来の自治体が主体の公共図書館とは一線を画したサービスや活動プログラムを提供している。多様な層がそれぞれの興味や居場所を見つけられるよう、乳幼児・児童・10代向けスペース整備、アーバンセンター、カフェ等の機能が加わり得られた。そして、いわゆる児童館のような場や、都市計画・まちづくりの活動の場、大学のサテライト、多世代が気軽に過ごせる場等が展開している。

アントネッラ・アンニョリ氏へのインタビューで詳細を確認できるが(→p.46)、多様な市民層の居場所となるということは、貧しい人やホームレスの人など社会的な助けを必要とする人々を受け入れるということでもある。このため、そうした知や文化を通じたソーシャルな支援や支援につながるための結節点となる、公共施設の現代的な意義を問い直す「新しい図書館」のあり方が模索される必要があった。

サラボルサ図書館は、都市の歴史的故事の中心にあって、歴史的建築を活用しながら、物理的な空間整備と共に、これまでの図書館司書スタッフでは難しかった多様な市民向けプログラムを展開する場である。



写真16 インフォメーションデスク



写真17 一般閲覧室



写真18 講堂

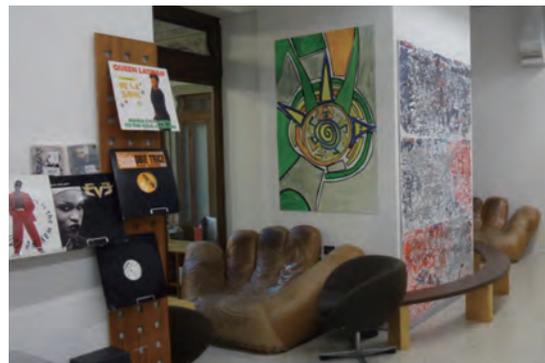


写真19-21 家具や書棚がユニークな児童スペース、レコード視聴コーナー



写真 22 3階テラスのミーティングブース
ボローニャ大学の講義が行われることもある。小規模な市民講座などの場としても使われる。



写真 23, 24 : ボローニャ大学のポルティコ空間

- 2) 小篠隆生, 小松尚: 「地区の家」と「屋根のある広場」イタリア発・公共建築のつくりかた; 鹿島出版会 2018
- 3) ボローニャ大学, <<https://www.unibo.it/en/university/who-we-are/our-history/the-numbers-of-history>>
- 4) Bibliotheca Salaborsa, <<https://www.bibliotecasalaborsa.it/>>

3. ボローニャ大学とサラボルサ図書館

大学の原点にして、ヨーロッパ最古の大学といわれるボローニャ大学の本部は、サラボルサ図書館から徒歩5分の立地である。

ボローニャ大学は1088年設立とされ、中世都市としてのボローニャの発展とともにその歴史を刻んできた。街中に張り巡らされたポルティコのネットワークが、街中に点在する講義室群を結び、時にはそれ自体が講義室となったと伝えられている。今回の訪問時もザンボーニ通り沿いのポルティコは、講義室から出てきた学生たちのコミュニケーションの場となっていた (写真 23, 24)。

2008年にオープンしたサラボルサ図書館3階のアーバンセンターは、その設立と運営にボローニャ大学が主体的に参画している。現在は組織形態がファンデーションになり、活動規模が大きくなったことから、サラボルサ図書館の隣の建物に移動した。講義室を出たポルティコの街路空間だけではなく、まちの中心に位置する図書館も含めて、ボローニャではまち全体が大学キャンパスとなっている (写真 25)。



写真 25 : ボローニャ大学の周辺
大学の建物群はまちに溶け込んでいる。